

吉田鐵郎の建築構成原理再考

—初期モダニズムにおけるリゴリスティックな実験について—

清水 大輔

1. 研究の目的と方法

1-1. 既往研究の枠組み

吉田鐵郎（1894 - 1956）は、大正中期から昭和初期にかけて主に通信省の技師として設計活動に関わった建築家である。在来の研究では、東京中央郵便局（1931）と大阪中央郵便局（1939）を代表作とし、柱・梁架構の立面への表現、庇の導入により日本的モダニズムを完成させたというRC造への評価と、戦時下に設計した優れた木造建築が高等海員養成所（以下海員養成所、1943）を以って完成し、戦後の通信省木造庁舎の原型になったという評価の、大まかには二つの方向から位置付けが為されてきた。しかし、従来の評価はいずれも吉田の設計活動を〈スタイル完成〉に至るまでの差異として認識することが主眼とされ、その差異がどういった内的連関（構成原理）に基づくのかについては具体的に触れられていない。また、吉田の設計になる百件余の建物の内、上記の枠組みから外れた建物は不問に付され、全体像が狭い範囲に閉じ込められてきた傾向がある。

1-2. 本研究の目的と方法

本研究は、これまで言及されなかった建物に従来の研究に再考を迫る要素があるとし、設計手法の転換点を中心に言及されてきた在来の評価軸に疑問を付し、吉田の設計活動の根底にある一貫した特徴を追う。具体的には、吉田の設計活動を〈スタイルの完成〉と捉える枠組みの方法的限界を挙げ、〈継続的な実験過程〉へと読み直し、その実験を三つの成分から分析する。次にそれらの成分が、リゴリスティックな構成原理の追求という点で統一して把握できるとする。総括では以上の枠組みで捉え直した吉田鐵郎の位置付けを、国内に限定せず初期モダニズムの中で検討していく。

1-3. 矢作の真壁の用法再考

矢作が吉田の柱・梁架構を評価する際に真壁という語を用い、それが本来の真壁の意味から外れるものにまで適用ⁱⁱされることで返って吉田の設計の特徴を分かり難くしていることを述べている。

2. 吉田鐵郎における建築構成法の特徴（I）

- 構法と規範 -

2-1. 実験 I ビルディングエレメントの切り詰め

2-1-1. RC造建築に見る切り詰め

従来の研究では、東京中央郵便局以降は構造合理主義の追及として説明されており、その完成とされる大阪中央郵便局では立面が柱・梁、開口のみで構成されている。一方、北陸銀行福井片町支店ⁱⁱⁱ（以下福井片町支店、1952、図1）には柱・梁の区別はなく、正方形に近い面一のグリッドフレームで囲まれ、柱と梁に当たる部分は幅まで等価に扱われている。ここでも吉田の切り詰め実験はまだ継続しており、これは、柱・梁架構で吉田が〈スタイルの完成〉に至ったとの評価に再考を促す事例と考えられる。また、一階の下半分と旧館隣接部分の石貼りは、表情を意図的にガラスに似せたかのようにあり、材料とテクスチャーの関係が曖昧である。既往研究では、大阪中央郵便局以後のRC造ではその延長線上にある北陸銀行新潟支店（以下新潟支店、1951）を取り上げるのみで、福井片町支店は見過ごされてきた。その結果、吉田の実験は狭い範囲（[吉田=柱・梁架構]という図式）に押し込められてしまったとする。

2-1-2. 木造建築に見る切り詰め

木造建築の堅羽目板に注目し、大阪中央郵便局梅田分室（以下梅田分室、1935）から海員養成所にかけて、目板張りから納め方がより厳しい合決りに変わっていることを指摘している^{iv}。以上2-1. で見た切り詰めは、材料としての特性と限界に前提としては規制されながらも、その構成原理は材料を素材として生かすのとは別次元の発想と捉えられるとし、これは木造、RC造の区別なく吉田の設計を読み解く手掛かりの一つであろうとの考察を加えている。

2-2. 実験 II 材料と接合方法の解釈

2-2-1. 京都中央電話局新上分局

京都中央電話局新上分局（1924）に於いて、塔右手の柱型と屋根がお互い侵食し合っているとし、その矛盾は屋根の納まりを考慮して塔を手前に押し出

すことで回避できることを示す。平面図においてその問題が解決されていないのは、屋根と塔の間に主従の区別をつけない判断からだとする。

2-2-2. 北陸銀行福井片町支店

福井片町支店の増築部分のエスキース（図2）を見ると、接合部を旧館と凹ませて分節する案と双方を面を合わせてぶつける案があり、実施では両者を互いに分断する後者の案が選ばれていることを指摘している。また、同様の分断が接地部分にも表れているのではないかと指摘している。

2-2-3. 別府市公会堂

別府市公会堂（1928）におけるスクラッチタイルの使用とメートル法のラウンドナンバーによる設計が、ディテールにおいてアーチの中途半端な切断に至っている点を挙げる^v。同様に、階高にもラウンドナンバーが使用され、正面の五連アーチの成と内部天井が一致せず、その段差が中空のRCに吸収されていると指摘する。これらのことから、吉田がディテールの外から構成を決定していると推察する。

2-2-4. 組積造とタイル

2-2-3. と関連して大阪東郵便局（1931）を取り上げ、曲面や芋目地の使用、アクソメにタイル表現が見られない点を挙げ、吉田が組積造を重視していなかったと指摘している。以上2-2. を、形而上の構成原理貫徹のためにディテールを犠牲にした、剛直な判断の事例としてまとめている。

3. 吉田鐵郎における建築構成法の特徴（II）

- 細部手法 -

3-1. 実験III 材料と構成原理

3-1-1. 羽目板の用法

海員養成所と同時期の設計になる藤沢無線電信講習所（1943）が横羽目板張りである点に触れ、従来の[豎線＝吉田]の図式^{vi}からはみ出ているとし、豎羽目板と横羽目板が並存する仙台通信診療所霊安室（以下霊安室、1937、図3）の例を引く。この用法は羽目板を単に建物を包む機能とする考えからはみ出るとし、ある種の配置操作実験であるとする^{vii}。

最後に、八戸郵便局電話事務室（1934）で豎長窓と横長窓が並存する例を挙げ、材料に拠らない操作だとする。

3-1-2. 木造と大壁

3-1-1. で言及した霊安室に似た小木造建築^{viii}が吉田の設計活動の中で十年毎に計三度登場することに触れ、それら三件の木造は片流れ屋根、羽目板、壁面白塗りの三点で共通しているとし、吉田の設計活動の根底に一貫した建築のイメージがあったことを指摘する。さらにそのイメージが、木造ともRC造ともつかぬ外観をしている点^{ix}が、木造で大壁を用いたことと関係するのではないかとの考察を加える。

3-1-3. ボリュームの完結性

3-1-2. を受け、木造ともRC造ともつかぬ小建築が馬場清彦邸（1936）付属のRC造倉庫（図4）にも見られ、それら全てが建築的痕跡を残しながらもある種のボリュームの完結性を指向しているとする。また、幾何学的なボリュームからの発想でないことから、吉田が建築的な要素とそうでない要素との選り分けを行っていたのだろうとしている。

3-1-4. 材料とモチーフ

東京中央郵便局の門型モチーフ^xが、既に木造の前橋郵便局（1926）やRC造の別府郵便局電話事務室（1928）で使われていることを根拠に、吉田が必ずしも材料を起点にかたちを構想していたわけではないという3-1. の論旨を補強している。

3-2. 実験IV 形式と欄間のかたち

3-2-1. 欄間というポキャブラリーの解体

梅田分室から海員養成所への欄間のかたちの変化を事例に、欄間が従来のポキャブラリーの範囲からはみ出て行く様子に言及し、それらの変化は欄間のかたちを直接弄ることによってではなく、建築の構成方法（形式）を操作した結果として表出しているとする。

3-2-2. 福島電話中継所

福島電話中継所（1934、図5）二階部分では、壁面を水平移動するに従って窓と欄間の関係が変化していき、最後には窓が消えて欄間のみになり、不自然な壁面が放置される事態が生じているとする。これは伝統的な窓や欄間の語法を離れた展開であり、吉田がポキャブラリーからではなく、ある種の建築の形式がもたらすかたちの実験をしていたと推察し、3-2-1. の実験のヴァリエーションと位置付ける。

3-3. 実験V 開口のリズム

3-3-1. 中野 - 釜戸電話中継所

中野 - 釜戸電話中継所 (1938、図6) においては、一、二階の部屋割りが違っても関わらず、一階立面の開口が二階の部屋割りに引き摺られていることを指摘する。次に、一階立面に開口が上下二つに分割され、上昇に伴い開口の成が伸びる三層構成の奇妙な箇所があることに触れる。また、一階と二階の開口周りの十字型壁面は垂直、水平共に幅が等しく、その意図を一貫させるために窓と壁の納まり (水切りなど) が簡略化され、庇も設けず輪郭を際立たせてあることを指摘する。以上、室内の用途とは別の判断で立面が決定されていることを指摘している。

3-3-2. 赤羽郵便局電話事務室

赤羽郵便局電話事務室 (1935) は不整形な平面だが、西立面を見ると左右対称を基本に中央の壁面のパターンを左右で転調させつつ、その立面のみである種のまとまりをつけようとしていると考察する。

3-3-2. 実験のヴァリエーション

同時期 (1929) に設計され規模も似通った三件のRC造の建物を取り上げ、吉田の実験パターンのヴァリエーションに言及する。御徒町郵便局では正方形の開口から残された壁面が垂直、水平方向共に幅が等しいこと、森下町郵便局では一階の欄間が恰も二階 (或いは中二階) の開口であるかのように配置され、上昇するにつれ開口の成が間延びしていること、栄久町郵便局では開口が水平方向にずるずる繋がっており、開口間の壁面長さ各階の開口の成が抽象的な比例操作によって決定されているらしいことに触れる。以上の事例が全て数的な秩序原理から発想されている可能性を指摘している。

3-3-3. 逓信省電気試験所永田町分室

逓信省電気試験所永田町分室 (1929、図7) は縦、横共に左右対称の柱割りだが、構造上の必然性がない短スパンの柱割があることを指摘し、その柱割りはL字型廊下のスパンを映しているとし、モダニスティックな立面の背後に実用に回収されない厳格な形式があることを指摘する。また壁面の対称形のパターンの崩し方もある種の形式に乗っているとする。

4. 初期モダニズムにおける吉田鐵郎

4-1. リゴリズム^{ix}

以上の論理展開は次の三点に要約できる。一つはビルディングエレメント切り詰めの実験が、材料を起点としない別次元の発想からくる形態操作実験であるということ (実験I)。一つはあるかたち同士がぶつかる時に、主従の判断を保留してそのまま矛盾を表現とする剛直な構成原理をとること (実験II)。一つは、従来のプロポーションの調和といった曖昧な言葉では説明できない形態操作によって、開口のかたちやリズムが不自然な展開をしていく実験である (実験IV、V)。上記三点から洩れた羽目板の配置による実験 (実験III) は、タイプとしては三番目の実験に統合できると考えられる。そして、これら三つの実験のベクトルは、新潟支店よりは福井片町支店においてはっきりと顕現しており、この建物を見過ごしてきた在来の研究に改めて再考の余地があるとする。また、こうした吉田の設計活動を、通俗的なモダニズムで一般に語られる建築の機能上の課題や、技術上の追求からもはみ出した、リゴリスティックな構成原理の〈実験過程〉として一括して把握することができるとする。

4-2. 吉田鐵郎の提起した課題

本研究で確認した、建築を寸法や形式で操作する実験パターンの性格が、同時代の建築家、ハンネス・マイヤー^xと並べて比較することでより明確になるのではないかと私の私見を述べ、吉田の位置付けを国内から初期モダニズムの中へと広げる手掛かりとする。

4-3. 総括

総括では、従来機能主義や材料と構法の一致など、モダニズムの典型として見做される傾向のあった吉田鐵郎が、その枠に収まりきらない形式による構成原理の実験を追及していたことに触れ、同時代の国内のモダニストたちとは違う問題の捉え方をしていたとする。また、その事実をモダニズムと対立させて捉えるのではなく、初期モダニズムに於ける一つの実験パターンとして含みこんでいくことで、モダニズム本来の問題の拡がりもまた明らかになると結論する。

- i 主要研究者には矢作英雄、薬師寺厚、近江栄、向井寛がいるが、この内学術論文を発表しているのは矢作のみである。上記4人の吉田評価の枠組みは基本的に同じである。
- ii 本文では検見川無線送話所第二期(1937)での柱型の用法を取り上げている。
- iii 旧館への増築。旧館の設計は吉田鉄郎ではない。
- iv 詳しくは拙稿『吉田鉄郎の木造建築再考—吉田鉄郎の建物を一貫して読み解く評価軸構築への試み—』(2002年3月九州支部研究報告会)を参照のこと。
- v 詳しくは拙稿『旧別府市公会堂に見るディテールの切り捨てについて』(2001年10月建築学会全国大会(関東))を参照のこと。
- vi 矢作英雄「自抑性をもつ建築意匠について(2)」参照。
- vii 詳しくは注ivの拙稿参照のこと。
- viii 栃木氏銷夏邸(1928)と小住宅試案(1948)を指す。因みに前者では横羽目板が、後者では縦羽目板が使用されている。
- ix ここでは吉田鉄郎の構成原理に見る「あそびの無さ」、「硬さ」、「剛直さ」といった意味で用いている。
- x ハンネス・マイヤー(1889-1954)は、ヨーロッパ版構成主義であるABCグループ(1923-1939)を中心に活動した建築家で、例えばフライドルフの住宅地画(1919-1921)において、公共ホールの寸法を周りの住宅の倍スケールにそのまま拡大するという、ジャイアントオーダーに通ずる計画を実行したり、ベルナウの全ドイツ通商連合連邦(ADG B)学校(1928-1930)では、全ての部材を既製品とし、それらを工業生産の論理によって決定されたある種のオーダーと見做して建築を構成するといった実験をしている。事実吉田は1931年から一年間海外出張に出掛け、その旅先でベルナウの学校を熱心に見て廻っており、そこで自分と繋がる建築の実験を見出したことも十分に考えられる。

主要参考文献

【吉田鉄郎に関して】

- ◇『吉田鉄郎建築作品集』(吉田鉄郎建築作品集刊行会、東海大学出版会、1968)
- ◇『建築家・吉田鉄郎の手紙』(向井寛・内田祥哉編、鹿島出版会、1969)
- ◇向井寛編『吉田鉄郎・海外の旅』(通信建築研究所、1980)
- ◇向井寛『建築家吉田鉄郎とその周辺』(相模書房、1981)

【ハンネス・マイヤーに関して】

- ◇『Hannes Meyer 1889-1954: Architect, Urbanist, Lehrer』(Berlin: Ernst + Sohn, 1989)
- ◇Sima Ingberman『ABC International Constructivist Architecture, 1922-1939』(The MIT Press, 1994)
- ◇K・マイケル・ヘイズ『ポストヒューマニズムの建築 ハンネス・マイヤーとルートヴィヒ・ヒルベルザイマー』(松畑隆訳、鹿島出版会、1997)
- ◇シーマ・イングバーマン『国際構成主義の建築 1922-1939』(宮島照久・大島哲蔵訳、大龍堂書店、2000)

【日本近代建築に関して】

- ◇近江栄・堀勇良『日本の建築 [明治大正昭和] 10日本のモダニズム』(三省堂、1981)
- ◇『別府近代建築史 地誌』(別府観光産業経営研究会、1993)

【通信省に関して】

- ◇『郵政省の建築 戦後の木造庁舎』(郵政建築研究センター、1985)



図1 北陸銀行福井片町支店(1952)



図2 北陸銀行福井片町支店スケッチ



図3 仙台通信診療所霊安室(1937)

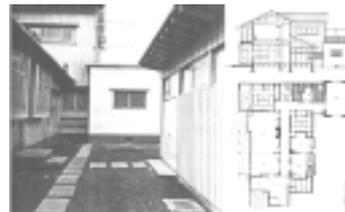


図4 馬場清彦邸(1936)



図5 福島電話中継所(1934)



図6 中野-釜戸電話中継所(1938)



図7 通信省電気試験所永田町分室(1930)